

2023年2月26日大齋節第1主日

創世記 2章 4b-9、15-17、25節－3章 7節

ローマの信徒への手紙－5章 12-19節

マタイによる福音書 4章 1-11節

庭の紅白の梅が満開です。春の始まりを告げているようです。教会のご近所の家では、早咲きの桜が咲いていました。教会の暦も、先週の2月22日（水）から大齋節に入りました。

大齋節は、イエス様の尊い十字架の死の意味を改めて覚える期節です。わたしたちが灰に過ぎない存在であることを改めて自覚する時です。そして、そのようなわたしたちのために、イエス様が十字架にかかり復活されたことをより深く信じるために備えをする時です。その意味では、信仰者であるわたしたちは、いつでも大齋節における思いを忘れないことが大切です。

さて、これらの意味から、大齋節最初の主日である本日の聖書日課は、罪、あるいは罪への誘惑に関する箇所です。旧約日課は、「創世記」の冒頭にある「禁断の果実」の物語です。主なる神様から「決して食べてはならない」と命じられていたにも関わらず、女は蛇に誘惑されてそれを食べてしまい、男も女に誘われて食べてしまうという物語です。教会の教えでは、この時、人間の原罪が成立したと考えます。これ以後、人間は本質的に罪ある存在となったと考えるのです。

使徒書のローマの信徒への手紙で、パウロが、「このようなわけで、一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように、死はすべての人に及んだのです。すべての人が罪を犯したからです」（ローマ5:12）とあります。パウロは、原罪という言葉は用いていませんが、イエス様の十字架の出来事の意味を神学的に考えたとき、それまで理解できなかった聖書の意味、すなわち罪や死を前提としないで創造された人間が、罪を犯し、死ぬべき存在となった理由を理解したのです。

すべての人間が死を免れないように、人間はこの罪を自らの力ではどうすることもできません。だからこそ、イエス様の十字架の死に大きな意味があります。イエス様の十字架は、信じる人間の罪をあがない、許して下さるからです。そして、イエス様の復活は、死が終わりではなく永遠の命の希望があることを示します。人間は、自分の努力では得ることはできない、罪の赦しとまことの希望を、イエス様を通して与えられるのです。そして、この罪の赦しとまこと希望は、個人の救いを超えてより大きな意味を持ちます。

罪の赦しの自覚は、すべての造られた人間が同じであることを意味します。つまり、他者と比較し区別した価値観を超えて、同じ人間であることを前提に歩み始めるのです。そして、その歩みは、競争や対立ではなく、赦しと希望を与えてくださった主なる神様の求める平和の実現へとつながるのです。

永遠の命の希望は、この世界の命の大切さの確認にもつながります。この世界の命も永遠の命も、主なる神様から与えられたものであるからです。永遠の命を奪い合うことができないことと同じように、地上の命を奪い合うこともできないのです。

イエス・キリストを信じることは、信仰者一人ひとりの救いを超えて、世界の平和へと結びつきます。そして、信仰者一人ひとりの歩みが、世界全体の平和につながるということこそが、主なる神様の愛に応えることにほかなりません。主なる神様が創造された「よし」とされた世界へと、混乱と戦いの世界を戻す歩みに他ならないからです。

さて、創世記を記し大切にしてきたユダヤ教の人々には、原罪という概念はありません。主なる神様は創造されたものを「よし」とされました。人間を「よい」ものとして創造されたのです。しかし、神様から与えられた人間の理性・自由意志は、間違った方向を選んでしまう場合があります、本日の旧約日課の物語はそのことを示しています。それゆえ、人間には判断の指針が必要です。それが律法です。律法とは、主なる神様の愛のしるしであり、罪に陥りやすい人間を導く存在です。このようなとらえ方は、今でも有効です。しかし、律法を指針としなくても、イエス様を通して主なる神様の愛に応えることができる、そのように信じ歩むのが教会の姿です。

さて、福音書の物語は、有名な悪魔による誘惑の物語です。この物語に登場する悪魔は、物理的現象で悪さをする力系？の悪魔ではなく、「批判する者、告発する者」という意味の挑発系？の悪魔です。言葉で人を迷わせ、間違った方向へと導くのです。イエス様は、空腹を満たすこと、神の子としての力を示すこと、富を手に入れることに関して誘惑を受けます。大切なのは、それらの誘惑の内容よりも、その誘惑の方法です。空腹を満たすことも、命を救うために力を発揮することも、それら自体は悪いことではありません。むしろ良いことかもしれませぬ。人間が自らの意志で良い方向を目指している、そう判断した時、悪魔が働く、そうこの物語は示しているのです。イエス様一人が、一個の石をパンに変えるぐらい大きな問題ではないかもしれませぬ。むしろ、貧困問題を解決することにつながるかもしれませぬ。しかし、そのあゆみは貧困を生み出している人間の考え方や制度を変えることはできないのです。それゆえ、イエス様は、きっぱりと拒絶したのです。

現代にも悪魔がいます。そして、イエス様の物語同じように、気を付けなければならないのは、一見良いと思われる行為にも働くということです。それがどのような事柄であるかをここでは具体的には示しませんが、高度なテクノロジーや、しっかりとした法律や制度、それらがあるがゆえに、悪魔のささやきは、イエス様の時代よりももっと巧妙かもしれないのです。

人間が正しいと判断し、間違った方向へと進んでしまう時、サタンは大きな力を発揮します。人間であるからその誤りに気が付かないからです。しかし、イエス様を信じともに祈るとき、人間であるからその誤りに気が付き、新たな歩みを始めることができます。そのように促すのが教会です。これからもイエス様の働きに学び、ことにイエス様の十字架に示された深い意味を心に刻んで、歩んでいきたいと思ひます。

今年も教区から「み言葉と歩む大齋節」が発行されました。どうぞご利用ください。わたしたちの教会では、大齋節期間毎週礼拝後、山野貴彦氏による学びの時があります。学びと信仰を深めるためにどうぞご出席ください。